

Fiction Alternativ novels

邪悪爆乳○学生 NOVEL

～ぱいずりオムニバス～

二式龍二/nIsiki Ryuuji



イントロダクション

「はやく、おちんぼ出させて」

夕暮れがかった放課後の教室で、だらしない格好で椅子に座った女の子が言った。ピンク色の薄地のタンクトップから、たわわに実った爆乳がほとんど零れ落ちそうになっていて、しかもブラジャーを付けていないから乳首が浮かび上がっている。

更に、薄いオレンジ色のスカートからは清純な真っ白いパンティが見えていた。

そんな破廉恥な格好をしているクラスメイトを、同じ位の背格好の女の子はできるだけ見ないように視線を逸らしていた。

しかし、あまりにも魅力的なおっぱいを前にして、その引力を拒む事はできない。欲望に負けてチラ見してしまうと、すぐにそれは女の子に伝わった。

「今おっぱい見たな？」

「っ——」

女の子はわざと乳首を露出させるようにタンクトップを動かし、男の子を挑発する。

海綿体に流れ込む血液量があり、びくんっ、びくんっとおちんちんが反応した。

男の子は息を荒くしながら、女の子のえげつない誘惑に耐え続けている。



「早くパイズリさせる♡」

女の子はオラついた邪悪な表情で、うずうずしながら言い放つ。

しかし男の子はあまり乗り気では無く、動揺してキョロキョロ周りを見渡している。

「こ、こんな場所で無理だよっ」

男の子は半ズボンをがっちり両手で掴み、絶対に脱衣しないと意思表示をした。

しかしそのポーズとは反対に、おちんちんを勃起させてズボンにテントを張っている。

恥ずかしくなった男の子は、Tシャツの裾を引っ張って勃起したモノを隠そうとした。

「いやーだ、今日は絶対するって決めたから」

どれだけ拒絶されても全く譲る気のない女の子。

「誰かに見られちゃうって……」

「大丈夫だっの」

女の子は頬を膨らませ、反発する男の子を強引に説得しようとする。

それに男の子が痩せ我慢している事はバレていた。

「お前も、シて欲しいんだろ？」

そう言っただけの子は、白いソックスに包まれた足でおちんちんをさすさすと擦る。

「んう……」

目を細めてニヤける女の子、男の子はおちんちんを軽く刺激されてガニ股になった。

「お前のおっきいおち○ぼ、パイズリするのにならうどいいんだもん♡」

「っ——」

そう言われた途端、男の子は顔を赤らめモジモジして視線を泳がせる。

男の子だって本当は女の子にパイズリして欲しい、でもいつ人が現れるかわからない

教室の中では、劣情に身を任せる事は中々に困難だった。

「今日はサービスでしてやるから、な？」

女の子は普段、色んな男やクラスメイトから様々な理由でお小遣いを貰っているが、

それとは別に苛々する事があると、お気に入りの男子を呼び付けてストレスを発散する。

ストレス解消法にも色々あるが、一番は【パイズリで射精させる】ことだった。

大きなおっぱいでおちんちんを挟んだ時に、男の子が見せる弱々しい表情が好物で、

女の子はそれを見るとプラスチックが全て吹き飛んでしまう。

だから今日も、ムカつく事があったから男の子を放課後に呼び付けたわけだ。

「いいだろ？ たつぷり気持ち良くしてやるから♡」

上目遣いの女の子にひそひそ声で語り掛けられ、男の子はもう我慢ができなくなった。

「うん……」

男の子は頷くと、すぐにズボンとパンツを一緒に下ろしておちんちんを露出する。

同年代の男の子よりも大きなおちんちんは、既に血管が浮くほど勃起していた。



「おい、シャツ邪魔」

「う、うんっ……」

引っ張られて伸びたシャツの裾を両手で掴み、ゆっくりと持ち上げていく男の子。スカートをたくし上げてパンティを見せるような女々しい仕草で、顔を真っ赤にしなから勃起したおちんちんを晒す男の子。それを見た女の子は思わずニヤニヤした。

「くくっ、ほんとでっかい♡」

女の子が上半身を屈めておちんちんに顔を近付けると、男の子は肩をビクツと震わす。生温かい鼻息と吐息がおちんちんを責め立て、男の子はガクガクと足を揺すった。

「ほら、来いよ」

そう言っただけの子は、躊躇なくタンクトップを捲り上げて綺麗な美爆乳を放り出す。

小さめの乳輪と綺麗な桃色の乳首がまろび出て、男の子は目を見開きそれを凝視した。

——ごっくんっ、

女の子が両手でおっぱいを持ち上げると、唾を飲み込む音が静かな教室内に響き渡る。

「早くしろって、誰か来たらどうすん だよ」

女の子が急かすと、男の子は一步前に進んでおちんちんを女の子の胸元にかざす。

おっぱいを寄せればすぐにでもパイズリが始められる、その距離感がおちんちんを更に太くし、男の子は腰を突き出して自分からおっぱいに挟まれようと前進した。



《びゆるるうつ、びゆるるうつ、びゅうつ、》

今日一発目の濃厚な精液が、男の子の鈴口から天井に向かって一気に放出されると、チューブのりのような若いコツテリした精液が、女の子の谷間に降り掛かる。

女の子の大きなおっぱいに大量の精液をぶっつけた男の子は、シャツの裾を片手で摘み上げながら、大口を開いて舌を伸ばした変顔で快感の余韻を堪能していた。

「うう……うう……」

男の子は肩を痙攣させ、おしっこを終えた後のようにぶるつと腰を震わせる。

「おい、全部出せよ？」

女の子はそう言って、あつという間にヌルヌルになった谷間で逝き立てのおちんちんを優しい乳房で挟み込みながら、ゆっくり上下させて残った精液を搾り抜く。

「うう、うあつ……」

《びゅつ、びゅびゅつ……》

尿道に残った精液も残さず搾り取った女の子は、満足そうにうつすらと微笑む。

とても幼いのに健康的な色香を纏い、一回り大きな女性と遜色無い色気を目元に漂わせ、しかも文句の付けようのない爆乳美少女とはあまりにも出来すぎている。

男の子が後退りして一度おちんちんを引き抜くと、どろつと精液が谷間から溢れた。

その精液がスカートに落ちないように、女の子は手で掬っておっぱいに馴染ませる。

「もう一回、イけるよな？♡」

男の子はチラッと廊下の様子を伺い、すぐに何度も頷いてパイズリを催促した。

今自分がいる場所が公共の場所だという認識を忘れた男の子は、すでに快樂の虜だ。

おちんちんをおっぱいに擦り付ける事、それだけが男の子の脳内を占領している。

もっともっと、大きなおちんちんを乳房の中に潜り込ませたいと夢中になっている。

「この中、すごい事になってるぞ♡」

腕を畳み、両腕で左右からおっぱいを押し潰すと、谷間の奥深くまでこびり付いていた精液が押し出されて、谷間からぶちゅりと滲み出る。

淫靡な白濁ソースに裝飾されたおっぱいから、いやらしいフェロモンが溢れ出ている、

男の子の視線は釘付けになっていた。

「次はお前が動かしていいぞ？」

「えっ」

女の子は両乳を擦り合わせて、にちゅつ♡ぐちゅつ♡と音を鳴らす。

谷間の密度がどれほど高まっているのかを視覚と聴覚に教え込むと、男の子は口の端から僅かだが涎を漏らしながら、じりじりとおっぱいに近付いていく。

——ごっくん、とまたしても大きな嚙下音を鳴らした男の子の目には、女の子精液まみれのおっぱいが、生クリームの載ったパンケーキのように見えていた。

「い、入れるね……」

「早くしろって♡」

わざわざ許可を取ってくる男の子に気を揉みながら、女の子はおっぱいを突き出す。男の子はすり足で少しずつ前に動き、精液で濡れたおちんちんをおっぱいに近付け、谷間にびとつと亀頭を触れさせて、入り口でにゅち♡にゅち♡と出し入れた。

「あつ、あう……」

敏感な亀頭が少し谷間に差し込まただけで強い性感が襲い掛かる。

男の子は腰を引いてはすぐに差し込むのを繰り返し、その寸止め感を愉しんでいた。

「お前、ほんとそれ好きだな……」

女の子は呆れながら、男の子がおちんちんを遊ばせているのを傍観する。

「だって、これっ、これえ……」

お尻をフリフリしながら、様々な角度でおちんちんを谷間に突っ込む男の子。

谷間に出来上がった直線の窪みに亀頭を少しだけ挿入してはスライドさせる、それが気持ち良過ぎて男の子は夢中で繰り返した。

「ちっ——」

女の子は気付かれないように両足を浮かせて、男の子の太ももに足を掛けて手前に引き寄せると、その勢いでおちんちんがヌルヌルの乳肉にめり込み、男の子は声を上げた。

「あつ、だめっ、だめえっ」

緩慢な刺激で寸止めを楽しんでいた男の子は、唐突な強い刺激に慌てふためく。

「うっさい、逝けっ、逝け逝けっ♡」

女の子は両足を素早く屈伸させて、逃げようとする男の子の腰を自在に操り、おちんちんをおっぱいに何度も挿入させると、男の子はすぐに我慢ができなくなり絶頂した。

《びゅううう、びゆるううう、びゅううううううっ、》

射精した瞬間に女の子の細い脚に抱き締められながら、男の子はおちんちんを乳布団に強引に寝かし付けられ、その中で豪快に精液をお漏らしする。

「あうう、つああつうう、んあああつっ、」

おちんちんがおっぱいに絡め取られ、抜け出せなくなった男の子は小さく喘ぎ続ける。

その弱々しい表情が女の子のサディスティックな性癖に火をつけ、男の子が泣くまで精液を搾ってやろうと両脚をガツチリとクロスさせる。

「おら、もっと出せ出せ♡」

女の子は両手を男の子の背中に回し、両手両脚で男の子を抱きしめておっぱいを密着させて、逝ったばかりのおちんちんを入念におっぱいで揉み潰す。

「逝っちゃえ、ばーか♡」

男の子はそう言われた瞬間、頭が真っ白になって自分からおっぱいに押し付けた。

《びゅううう、びゅつう、びゆるるうつ、》

「ああうつつうつつう、あああつ、あああつつつう、」

男の子は誰に聞かれるかも知れない教室で、弱々しくも甲高い喘ぎ声を上げた。

「もつと逝け、もつと♡」

様々な形に変わり続けるおっぱいが、おちんちんに四方八方から執拗に纏わり付き、

男の子は変幻自在の乳圧によって精液を次々に垂れ流す。

口を開けっぱなしにして、男の子は女の子の爆乳に締め上げられる快感に浸った。

女の子は精液を搾り尽くしたのを確認し、おっぱいで男の子をドンつと突き飛ばした。

「わっ……」

解放された男の子は尻餅をついて床に倒れ込み、女の子は椅子から立ち上がる。

「あー楽しかった」

おっぱいを精液まみれにした女の子は片手でおっぱいを下から支え、机の上にあらかじめ用意しておいた、ポケットサイズのウェットティッシュを男の子に投げ付ける。

「早く掃除」

「は、はいっ」

言われるままに男の子はおっぱいにこびりついた精液を拭き取り始める——と、

女の子はその光景を覗き見していた何者かに気付き、邪悪に微笑んで下唇を舐めた。

「二人の男の子を精通させる邪悪爆乳○学生」

「おい、おまえっ」

放課後の教室に響き渡る声が、ガヤガヤと騒しかった喧騒をぴたりと止めた。

声の主である女の子は両手を腰に当てて仁王立ちになり、一人の男の子を睨んでいる。くりつとした大きな瞳、目尻が高くキリツとした吊り目、教室内の他の子よりも顔立ちがしっかりしているが年相応の幼さは残しており、抜群の可愛さを持つ女の子。

サラサラで艶々、キューティクルが光を反射して天使の輪を映す綺麗な黒髪。

その黒髪をヘアゴムで結び、可愛らしいビッグテールを左右にぶら下げている。

身に付けているピンク色のタンクトップはダボダボだが丈が短く、履いているオレンジ色のスカートからは健康的な色の細足が伸びていた。

ただ女の子は、その可愛い足と靴下も履かず上履きに突っ込んでいる。

「……」

呼び付けられた男の子は、自分に対しての言葉だと分かった上で振り向かずにいる。やり過ぎせばどうにかなると考えたわけだが、その樂觀視は完全に悪手だった。

——ちッ、

無視されたと思った女の子は、表情を急変させてギロリと目つきを鋭くする。

そして女の子は、足音を大袈裟に鳴らしながら男の子に一気に距離を詰めた。

「お前のことだよ、おーまーえっ」

行儀良さのカケラもない乱暴な言葉遣いに、男の子は肩をビクツと震えさせる。

二度目の呼び掛けと同時に、女の子は呼び付けた男の子に身体ごと体当たりをした。

「——は、はひっ」

そうなることは無視することもできず、男の子はあまりにも情けない声で返事をする。

更に、男の子は肩にポンッと手を置かれて驚きのあまり背筋を反らした。

「なに？ トイレでも行きたいの？」

「ち、ちがうよっ」

もちろん男の子は催したわけではない。小さな手と同時に、女の子の身体の一部が男の子の背中に接触したことが、ヘンテコな動きをってしまった理由だった。

「じゃあなに？」

男の子は素早く身体を反らしたが、女の子は分かっているのか更に距離を詰める。

女の子は男の子が逃げようとしたと勘違いして、背後から歯がはじめにしまったものだから恐ろしい。

そうなったら、男の子の背中にべったりと女の子のおっぱいが密着してしまう。

それも普通のサイズのおっぱいではない。

無乳、微乳、普乳の女の子達が羨むそのおっぱいは、爆乳と呼ばれるサイズだった。年齢通りの小さな身体とはあまりにも不釣り合いな大きさのおっぱい。

ウエストが細いせいで、もしカップ数を測ったらとんでもない結果が出るだろう。そのとんでもないおっぱいが、むにゅうううんと男の子の背中を圧迫した。

「お——おっ、おっ」

女の子に抱きつかれてあまりにもビックリしたらしく、男の子は奇声を上げる。

男の子は『おっぱいが背中に当たっている』と言いかけたが、グツと堪えた。

「何それキモ」

その突飛な反応に女の子はドン引きして表情を歪めた。

「ちよ、ちよつと、離し、て……」

男の子が抵抗すればするほど、女の子もムキになって力強く抱きしめてしまう。

しかもこの歳の頃は男の子と女の子の力差もあまりなく、中々脱出することができない。相手が女の子だからと遠慮しているわけでも無い、純粹に力負けしていた。

「離れたら逃げるじゃん」

それに加え、おっぱいが与える心地良さによって男の子の思考が阻害されていた。

性がちゃんと芽生えていなくても、その柔らかな感触だけは意識せずにはいられない。

「ねえ、止めないの？」

騒ぎを見て、ようやくそんな声も周りから聞こえてきた。

でも声の主は自分から助けようとは思っておらず、他のクラスメイトも一緒だった。

「私は無理、絶対無理」

ボソボソと、その光景を直視しないようにしながら周囲の女の子達が声を漏らす。

仲がいいとか悪いとかではなく、ただ単に面倒ごとを避けている。

「それに、あいつだって喜んでるしさー」

そしてみんなが言わないようにしていた言葉を、その女の子はポロツと口にする。

意地悪っぽく笑い、きひひと小さく声を漏らした。

「しーっ」

それを聞いた別の女の子は顔を真っ赤にし、人差し指を口に当てて囁く。

しかしその『喜んでる』という感想は、見守っている女の子達の共通認識だった。

耳年増というか、性の知識が男の子よりも豊富な女の子ならではの感想だろう。

「ほんとだ、だって……」

「あ、見てみて」

みんな目敏くその小さな膨らみに気付いてしまい、目の色が変わっていく。

その馬鹿にしたような冷やかすような視線を、男の子も敏感に感じ取っていた。

「ほ、ほんとに、やめて……」

周りにいる女の子達の視線に晒されたことで、より一層男の子は顔を真っ赤にする。季節柄、生地薄い半ズボンを履いていたのが男の子の運の尽きだった。

まだ幼くて、大きくなることすら最近まで知らなかった男の子のおちんちんが、ピクンピクンとリズムを刻みながらズボンの生地をぐいぐいと押し上げている。

それを見た女の子達は興味深々だったり、嫌悪感を表していたり、正義感から注意しなくてはやキモキしたり、自分のペタンコなおっぱいを撫でてみたりした。

「お前が逃げようとしているから、だろー？」

しかしどれだけ男の子が懇願しても決して女の子は譲らない。

もっと別の言葉で、解放してもらうための理由を考えて言い返せば良かったのだが、『やめて』としか言い返せなかったのは男の子の落ち度かもしれない。

「おい、お前いけよ」

「やだよ……」

女の子達が多種多様なリアクションをしている中、男の子達は揃いも揃って内股で、トイレに行くのを我慢しているかのようにソワソワするだけ。

視線の先はもちろん女の子の大き過ぎるおっぱい。

女の子が目の前標的に夢中になっている隙に、チャンスとばかりに注視している。

「これどうすんの」

「すぐ終わるって」

羽交締めしている女の子の仲の良い友人達からはあまりにも楽観的な言葉が漏れる。力関係は歴然で、男の子が女の子に屈服してしまうのも時間の問題だった。

そして教室内があまりにも混沌としてくる。

「早く掃除したいのにー」

「じゃあ止めてきてよ」

掃除当番たちはそのやりとりを止めることができず、掃除道具を取り出したはいいが何もできずに立ち尽くしている。

勉強を教え合っているグループも、そのやりとりが気になって手が止まっている。

その他は、取っ組み合っている二人のやり取りを静観したり、議論を交わし合ったり、別の噂話で盛り上がったたり、その二人を中心に取り巻いているという形。

教師がその現場を見たら上手く捌いてみせるだろうが、不在ではどうしようもない。

「先生呼んでくる？」

「えーっ、それ私たちも怒られそう」

喧嘩を止めなかった人間も一緒に咎められる現状に、生徒達は積極性を失う。

だから、この場は今ここにいるクラスメイトが仲裁をする必要があった。

しかし、救世主は別の場所から唐突に現れる。

「ん？」

別のクラスからやってきた男の子が一人、その混沌とした教室を見て声を漏らす。

その子は開かれた扉からその光景を見て、緊急事態だとすぐに察知した。

「あつ」

その中で、今のクラスは違うが二年前に自分と同じクラスだった男の子が、女の子と取っ組み合っているのを見つけてしまった。

自分のクラスの問題ではないが、知り合いが喧嘩をしているのは見逃せない。

助け出さなくては——いや、二人を仲裁しなくてはと男の子は思った。

眼鏡を掛けた男の子は大きく深呼吸して、秩序の破壊者へと歩みを進めていく。

違うクラスの教室に足を踏み入れるのは緊張するが、でも今は放課後だ。

——ごくつ、

今は緊急事態なのだから仕方がないはずだと、男の子は自分に言い聞かせた。

頭をぐるぐると回しながら、何と云って二人を仲直りさせればいいかを考える。

喧嘩の理由さえわからないが、それでも仲裁できる方法を編み出せばいい。

じゃあ一度二人の距離を離して、二人に冷静になってもらうしかないだろう。

そうと決まれば後は実行するのみだ。

「と、トイレ行かないかっ？」

二人が騒がしく喚いている教室内で、とても真っ直ぐな響きの声音が喧騒を制した。

女の子は自分の背後から唐突に飛び出した声に眉をひそめる。

「んん？」

背後を取られたことに苛ついた女の子は、爆乳をぶるんと横振りして反転した。

解放された男の子は、慌ててズボンのウエスト部を持って下腹部の具合を調整する。

「それアタシに言った？」

ぶるんつと、ノーブラジャーのおっぱいを揺らし、ぷっくりと膨らんだ乳首の形が凝

視しなくてもわかるほどに、女の子は偉そうに踏ん返り返って胸を張った。

仲裁するはずが、女の子の標的が自分に向いたことに眼鏡の男の子は狼狽えた。

「その子と、二人でトイレ行くなって約束してたんだ」

全くのでまかせだが、小便するのを邪魔するというのは中々に難しい。

それを聞いて女の子もハツとするが、すぐに先ほどのやり取りを思い出した。

「は？さっきトイレじゃないって言ってなかった？」

イライラした表情を浮かべる女の子。

すぐに反論した女の子に、自分が間違った助け舟を出したことを悟る男の子。

しかしながら、二人のやり取りを聞いていない男の子には仕方がないことだった。

「なあ、言ったよな」

目を細め、強い威圧感を全身に漂わせた女の子は振り返り再度男の子に詰め寄る。

「ご、ごめん、今、思い出した」

流れを察知してすぐに自分の発言を訂正したのは、男の子のフラインププレーだった。もし少しでも躊躇していたら、女の子の追求は避けられなかったかもしれない。

「はー？」

不愉快そうにする女の子。

しかしトイレの約束をしていたと言い張る二人をこれ以上引き止めてしまうと、教室に大きな湖ができてしまうし、先生にバレたら怒られる可能性もある。

だから女の子は、この場は一旦諦めることにした。

「あーもう、最初から言えよな」

ぷーっ、と頬を膨らませて、女の子は腕組みをしておっぱいをその上に乗せる。

周りでそのやり取りを観察していた男の子達は、強調された女の子の爆乳を注視した。しかしすぐに女の子に気付かれることを恐れて、見るのをやめてしまった。

「あーあ、私も大きいおっぱい欲しいなー」

睨み合いが終わった瞬間に女子達が湧く、みんな大人びたおっぱいに憧れているのだ。憧れではあるが嫉妬されていないのは、彼女がそれを自慢していないからだろう。むしろ、男の子にも強気で食って掛かる彼女のことを尊敬している子の方が多い。

「羨ましい……」

「おい、聞こえるって」

そして男の子グループはというと、さっきまで抱き付かれていた男の子の境遇を羨んでいた。何故あの男の子を標的にしたのかわからず、その法則を必死で考えている。

「二いいなあ」

羨望の声が教室中の男の子から漏れる、おっぱいがとても柔らかさそうだったから。触りたいと思っても簡単に触れるものじゃないし、そもそも触ってはいけない。

だから無理矢理押し付けられるような状況が、彼らには一番望ましいのだ。

今まで爆乳女子と揉めていた二人は、微妙な空気で見合わせていた。

樂觀的なノリは全くなく、どうにか逃げ切ることができてホッとしている感じだ。

「い、行こう」

「う、うん……」

男の子が二人、ぎこちない動きでトイレを目指して小走りする。

二人が教室を出ていった瞬間、周りの子供達は何もなかったかのように振る舞い、ようやくいつも通りの放課後が再開する。

爆乳を揺らし地団駄を踏んだ女の子は、ストレスを抱えたまま教室を出て行った。

「三人のおちんちんを精通させる邪悪爆乳○学生」

三つの個室トイレから、三人の男の子が女の子を囲むように立つ。

「で、何？」

女の子はひどく機嫌悪そうにした。

男の子達は三人で女の子を囲みながら、何か言いたげに様子を伺っている。

「帰ろ」

焦れなくなった女の子は、通せんぼする一人の男の子を押し退けて帰ろうとする。

それを見た男の子は女の子を通さないように妨害しようとするが、突き出したおっぱいに威圧されて、何もせずに見送ってしまった。

そして女の子がトイレから出ていく寸前で、別の男の子がやっと口を開いた。

「さっきッ——、何してたの？」

ただの興味本位ではない意味深な言葉、それは女の子の警戒を不用意に強めた。

「お前に関係ない」

ピシヤリと言い切る女の子、すたすたとそのまま男子トイレを出て行こうとする。

二人がどうしようもなく項垂れていると、最後の一人が気を張って口を開いた。

「先生に——」

そう言った瞬間、女の子は急に振り返って目付きを不自然に柔らかくする。

ニコニコしながら踵を返し、男の子達の方へと自分から駆け寄っていく。

「何して欲しいの？」

女の子は言いながら、おっぱいを腕で寄せてその大きさを強調して見せた。

当然、三人は揃っておっぱいを凝視してしまい、女の子はニヤツと笑ってしまう。

「わかった、さっきのして欲しいんだろ？」

「——っ、」

身体をびくつと震わせ、男の子達は俯きながらお互いの目を見合わせる。

個室だから全てを知れた訳ではないが、音と声を聞いて何かとてつもない事が行われていると三人は気付いた、それが自分達のおちんちんを膨らませる何かだと。

結局女の子の質問には誰も答えなかったが、その様子を見て女の子は全てを察した。

「先生にバレたら嫌だもん、内緒にしてくれる？」

すっかりおとなしくなった女の子を見て、やった、と三人はガッツポーズする。

女の子を言いくるめる事ができたと、そして、自分達も良い思いができるのだと。

「じゃ、保健室行こっか」

男の子達は不安そうにしたが、女の子について行くしかない四人で移動を始める。

——がららっ、

勢いよく扉が開き、白衣を着た男性の保健教諭がビククリして顔を上げる。

そして、三人の男の子を引き連れた女の子が保健室に堂々と入ってきた。

「君たちは？」

「失礼します……」

教育の行き届いている男の子に比べ、女の子は当然のように何も言わず入室する。

おどおどする男の子達を見て、女の子は小さく溜め息を吐いた。

「せんせー、ベッド使うから見張りよろしくー」

いつも使っているかのような慣れた口調。

「えっ、ちょっと……」

戸惑う保健教諭を無視して、女の子は角のベッドに乗っかりカーテンで覆い隠した。

先生を無視する女の子の横着っぷりに、男の子達は呆然としている。

「おい、早く来い」

「はいっ」

棒立ちになっていた三人の声が揃い、すぐにカーテンの中に入っていく。

三人がベッドの横に並んでいく——と、最初に入った一人が声を出した。

「わっ」

「ん？」

既に女の子は服を脱ぎ始めていて、ふるんふるんの生爆乳をあっさり露出する。

女の子は全く気にせずに、ベッドの上でパンツ一枚になって仰向けに寝そべった。

男の子達は、女の子のプリンのようにふるふる横揺れするおっぱいを凝視する。

「早くお前らも脱げ」

「えっ、」

三人の中で一番恥ずかしがり屋な男の子が声を出す、一早くパイズリして欲しい男

の子が我先にと脱ぎ始めると、釣られて二人も顔を赤く染めながら脱ぎ出した。

「ぶっ——まだ何もしてないのに、ちんちん大きくしてるんじやねーよ」

可愛らしいおちんちんが三つ、さまざまな形に勃起して横並びに並んでいる。

恥ずかしがっておちんちんを隠そうとすると、女の子はキッと睨み付けた。

「隠したやつは挟んでやらなーい」

女の子がそう言うと、すぐにみんな隠すのをやめておちんちんを晒す。

(ばーか)

完璧にコントロールされる三人を見て、揃いも揃っておっぱい馬鹿だと嘲笑う。

おっぱいを餌にすれば、どんな我が儘を言っても言う事を聞かせられる。

女の子はおっぱいをふるっと揺らし、その存在感を改めて三人にアピールした。

「じゃー順番決めて」

女の子は退屈そうに頭の後ろで腕を組み、足をバタバタと動かして埃を立てる。

三人が三人とも最初に挟んでもらえると思っていたのか、顔を見合わせて順番の決め方を思案しながら口を開いた。

「どうするどうする？」

「じゃんけんとか？」

「えー、俺じゃんけん弱いんだけど……」

小声で相談する三人を見てニヤニヤ笑う女の子。

女の子は既に二人のおちんちんを挟んでいるが、それでも最初の一人になりたい三人は平等に決める方法が無いかと意見を交わす。

「じゃんけんでいいじゃん」

「俺絶対負けるし、嫌だよ」

「じゃあ他に何かある？」

どうしても順番を譲り合う気のない三人、このままだと絶対に決まる事はない。

「あーもう、うっざいな……」

見兼ねた女の子は、身体を起こしてイライラした表情で三人を睨んだ。

下半身を丸出しにした男の子達は、ピリッとした空気に表情を強張らせる。

「ちんちんが一番大きいやつから」

ピシヤツと、女の子は言い切った。

三人は自分達のおちんちんを見て、そして隣にいる男の子のおちんちんと見比べた。

そこまで大きな差がなくて、三人は自分が一番だと主張する事ができない。

「ちんちんシコシコして、大きくしてみ？」

オナニーをした事がない三人は、『シコシコ』という言葉の意味がわからず首を捻る。

「こうやって、シコシコって」

手を軽く握って、上下に振ってオナニーの仕方をレクチャーする女の子。

しかしトイレとお風呂の時以外はおちんちんを触らないよう言われている男の子達は、そのジェスチャーがおちんちんを握って擦れという意味だと理解できない。

「こいつら、つかえねー」

おっぱいに食い付いていた割に、オナニーについては知らず女の子は肩を落とす。

「じゃあお前、ちよっと前来て」

指を指された男の子は、びくっと身体を揺らしてベッドに一步近付いた。

女の子はお尻をずりずりとスライドさせてベッドの縁に座り、邪悪に微笑む。

「お前らにイイことを教えてやる♡」

何をされるのか分からないが、男の子は一人だけ選ばれた事の喜びで浮かれていた。

「三人のおちんちんを精通させる邪悪爆乳○学生 i f」

三つの個室トイレから飛び出した三人の男の子が、女の子を囲むように立っている。

「で、何？」

女の子は両手を腰に添えて上半身を少しだけ傾け、おっぱいをぶらんと揺らした。とても威圧的なおっぱいだ。だが、本来持つ母性的な柔らかさが男の子を魅了する。

男子トイレというテリトリーは、少しだけ男の子三人を強気にさせていた。

「ごくっ、

三人の喉が見事に同時に鳴る。

「ん？」

何も言わない三人は、揃いも揃って視線をおっぱいに注いだ事である。

女の子はビクツツと身体を震わせ、明らかに様子のおかしな三人に警戒した。

「なんだよ……」

そして、その不気味さに女の子は身構えた。

男の子の目が血走っていたからだ。

明らかに発情している男の子達を前にして、女の子は大きく溜め息を吐く。

「えっと……」

「その……」

「ん……」

男の子達は三人で女の子を囲みながら、何か言いたげに様子を伺っている。

(こいつら……)

おどおどし続ける男の子の前に、女の子は足をパタパタ動かして音を鳴らした。

女の子は余計にイライラして、それを見て男の子三人は余計に声を出せなくなる。

ムラついているのに踏ん切りが付かない、とても中途半端な状態だ。

「言いたい事あるならハッキリ言え」

女の子はピシツと言いつつ、しかし誰も口を開こうとしない。

三人はそれぞれ牽制し合って一向に口火を切らなかった。

「お前、何か言え」

「えっ」

女の子は一人の男の子を指差すが急な事で男の子は驚き戸惑う。

「じゃあお前っ」

一向に答えてくれないので焦れつたくなった女の子は、次の男の子に指を差す。

今度は少し戸惑った後で口を開いた。

「さつき何してたの？」

興味本位なのだろうが、女の子はあまり聞かれたくない事を聞かれてたじろいだ。ああでもないこうでもない、色々な言い訳を考える女の子。

「べつに？」

女の子は開き直すことにした。

少し声を上擦らせた女の子は、これ以上追及されないように立ち去ろうとする。しかしそれを二人の男の子が通せんぼした。

「な、なんだよ」

押しは弱い、執念深い男の子に口許を引き攣らせる女の子。

既に女の子は面倒くさがピークになっていた。

「隠してもバレてるぞ」

一番顔を赤くして、鼻息が荒くなっている男の子が急に強気な口調で言った。

女の子の事を怖がりながらも、臆してはいけなさと拳を握る。

「ああ？」

ピキ——つ、と女の子のこめかみに青筋が浮かんだ。

通せんぼされ、質問責めにされ、更に過剰な追及をされて女の子はぶちギレる。明らかに怒っている女の子に怯えながらも、男の子は勇気を出して口を開いた。

「エッチな事してただろう」

一人の男の子が顔を真っ赤にしながら言った。

すると、男子トイレの中に無音の時間が訪れる。

他の男の子二人は、良く分かっているのか気まずそうにしていた。

「えっちなこと？なにそれ」

女の子は急にカタコトになって、男の子の言う事が理解できない風を装う。

そのバレバレの嘘に男の子は更に顔を赤くする。

「おっぱいで、おちんちん挟んでたんだろっ」

その指摘をした男の子は、恥ずかしさのあまり全身にドッと汗を掻いた。

女の子はまさかそこまでバレるとは思わず、ポカーンと口が開いたままになる。

「パイズリ、って言うんだよな」

行為の名称まで知っていた男の子は、クラスの中で一番有名なエロガキだった。

女の子はあちゃーっと額に手を当てる。

「聞こえてた？」

女の子が言うと、男の子三人が揃って頷いた。

途中で歯止めが効かなくなった女の子は、周りに誰がいるのか気にしていなかった。音を聞かれただけで、中で何をしていたかバレるとは思わなかった。

「はいはい、アタシはパイズリしてましたよーだ」  
根負けして自白する女の子。

男の子達は本当に予想が当たっていたと、顔を見合わせて湧き上がる。  
そんなエッチな行為を学校でしていた事に、男の子達は大盛り上がりだ。

「もういい？」

やっと解放してもらえると思い、女の子は深く溜め息を吐き出す。

「まだっ」

しかし男の子に拒絶されガクツと項垂れる女の子。

「パイズリって、どんな感じでやるの？」

「はあ？」

まさかそこまで追及されるとは思わず女の子は呆れ返った。

「どんなって、こういう感じ」

そう言っただけの子は着衣したまま、おっぱいを両腕でギュッと寄せて上下に揺さぶる。

もにゅん、むにゅんと激しくおっぱいを上下させると、男の子達の視線はそれに合わせるように上下した。

「すっげ……」

一番のエロガキは、おちんちんをガチガチに勃起させてその光景を見守っている。

「ほんとに、もう終わりっ」

パイズリのやり方まで披露して、もうこれ以上は譲歩しないと心に決める女の子。

でも、男の子達はさっきよりも興奮して女の子の事を視姦している。

というよりは、大きなおっぱいを凝視していた。

「お願いがあるんだけど」

そう言う男の子は、勃起したおちんちんを手で隠してモジモジしながら言った。

「もしかして……」

一仕事終わった後に、更なる労働を予感する女の子。

「その……えっと——僕たちにもパイズリしてよっ」

またしても男子トイレ内に無音が訪れる。

一人がそう言うと、残りの二人は続いてうんうんと何度も頷いた。

好奇心旺盛というか、エロガキというか、女の子がトイレに入ったのを見て尾けてきた辺り、性知識への興味が他の男の子よりも強かった。

「パイズリして……」

そんな事を頼まれても、と女の子は頬を指で搔いて困惑する。

「してくれないと——」

男の子は、ニヤリと口角を上げた。

「先生に言い付けてやるっ」

女の子を指を差し、男の子は出来る限りの悪い顔をして言った。

「えっと……」

そこまでダメーじが無いと思っただけ、女の子はポリポリと頬を掻く。

女の子の微妙なりアクションを見て男の子は戸惑った。

「学校でエッチなことしてたって言うからっ」

それを聞いても女の子の反応は微妙だ。

「言えば？」

余裕の表情の女の子は、しらっとした目で男の子を見返す。

もし言い付けられても教師を説得できる自信がある、それが理由だった。

「なんでっ」

男の子は用意した脅し文句が通用しなくて戸惑う。

もうこれ以上の交渉材料がなく、男の子は絶望してがっくりと項垂れた。

「じゃあね」

もう食い止める気力が無くなった男の子達は、女の子を見送る事しかできない。

悲しみに暮れる男の子達を尻目に、女の子はゆっくりと歩いていく。

トイレを出て、廊下に足を踏み入れようとしたその時だ。

「お願いしますっ……」

声に驚いた女の子が振り変えると、男の子三人が頭を下げていた。

本当にちゃんとした謝罪を示す時の、深いお辞儀をする三人。

「はっ、はあ？」

まさかそこまでするとは、と女の子は呆れ果てる。

実際、パイズリして欲しくて土下座してきた男はいたが、自分と同じ年齢の男の子が

そこまで性欲に縛られてしまうとは思わなかった。

「そんなに、して欲しいの？」

呆れ顔で言う女の子。

少し譲歩した女の子の様子を見て三人は目を輝かせる。

「二はいっ」

ビシッと綺麗に手を上げ、声を揃えて返事をする三人。

(しようがないなあ……)

熱意に押し切られ、女の子はパイズリしてあげる事にした。

別に減るものではない。それに、女の子はパイズリで男の子を射精させる事が好きと

いうか、一種の趣味みたいなものではあった。

とても期待した表情をする三人を前に、女の子は溜め息を吐く。

「邪悪爆乳○学生の夏休み」

「あつっ〜い」

女の子の間伸びした声が誰にも届かずに砂浜に沈んでいく。

それはあまりにも気怠げで、消え入りそうな声だった。

「死ぬう……」

真っ青な空と海を前に、小さな女の子がビーチパラソルの下、敷物の上に座っている。

小さな身体には不釣り合いな美爆乳をびっちりちのスクール水着に包んで、その上に

ピンク色のタンクトップを羽織る女の子。

だらしなく胡座を掻き、うちわを持って自分の顔をパタパタと仰いでいる。

夏休みのとある日、女の子はグループで海水浴場に遊びに来ていた。

泊まりではなく日帰りの小旅行。

グループに引き込んだ金持ちの男の子に強引に頼み込み、車で海に連れてきてもらったのは、女三人と男二人で構成された五人グループ。

男の子二人は使いぱしりとして、女の子二人は特に仲の良い友達を二人誘った。

波打ち際で楽しそうにする友人達を遠巻きに見つめ、早く混じりたいと気を揉む。



「うう……」

陽射しが強く海水浴日和ではあるが、それは主に肌を焼くことを目的とする場合で、ビーチパラソルの下で涼んでいても暑さを感じるのは、もはや猛暑と言っていい。身に付けているスクール水着は海水に浸してもいいのに、女の子の身体から流れる汗だけでじつとりと濡れてしまっていた。

「うわ、蒸れる……」

女の子はおっぱいがとても大きく、そのせいで胸の谷間に一番汗を掻いてしまう。

普段は通気性のいい服を着ているから気にならないが、スク水は少々窮屈だ。

グイッとタンクトップの胸元を引き下げ、露出した肌に向かって風を送り込む。

それでも谷間の奥にはあまり風が届かず、女の子はむーっと顔をしかめた。

——すると、ちょうど良く涼風が舞い込んで、女の子は両手で谷間を掻き分けて蒸れた肌に風を受け入ると、あまりの気持ち良さに目を細める。

「はふう」

続けて勢いのある突風が吹き抜けて、女の子は熱の籠った胸部や谷間を冷やすためにタンクトップを脱ぎ捨て、スクール水着の胸元を大きく広げて涼風を取り入れる。

水着の胸元を広げれば広げるほど気持ち良く、女の子はどんどん大胆になっていく。

そしてとうとう、誰にも見られていないだろうと片乳を露出してしまった。

「これ、いい……♡」

冷たい風が熱くなったおっぱいを冷ましていく。

片方ずつなら大丈夫だろうと、一度おっぱいを仕舞ってから今度は反対のおっぱいをぼろんと水着から取り出した。

両方のおっぱいが冷やし終わり、女の子がおっぱいを仕舞おうとしたその時——、

「すっげ」

偶然近くを通りがかった男女のカップルが、女の子の生おっぱいを目撃した。

女は自分の平坦なおっぱいと見比べ、男はその魅力的な美爆乳に釘付けになる。

「んー？」

女の子は見られていることに気が付きながら、わざと両方のおっぱいを露出した。

ビニールシートの上で仰向けになり、ふるんふるんとおっぱいを左右に揺らす。

おっぱいを強調する様々なポーズを取って、周囲の男の視線を遊ぶ女の子。

爆乳のグラビアアイドルのように全身がムチムチしているわけではなく、おっぱいだけが突出して膨らんだ刺激的なスタイル、乳輪も大人しいサイズで上品さがある。

お尻はキュッと引き締まっており、とても華奢な体型なのに胸だけが大きい。

そのアンバランスさがとても魅力的で、顔が可愛いのはもちろんだが、雰囲気は子供っぽいのに顔付きはやや大人びているというか、少し達観した表情をしている。

「おいッ」

「え——いのでデデえっ、」

女はドスの利いた低い声で囁きながら、視線が固定された男の脇腹を思い切り振り、男は大きな叫び声を上げながら女に引っ張られて現場から離れていく。

「ばーか」

ゲラゲラと腹を抱えて笑う女の子だったが、すぐに暑さによって真顔に戻された。

「——まだあ？」

早く泳ぎたいが、女の子は二人の男の子の到着するまでこの場を離れられない。

二人の男の子には別の役目が与えてあり、それぞれこの暑さに対抗するためのものを持つてくるように指示を出してあった。

だから女の子は、怠そうな表情で早く戻ってこいと念じ続けている。

「あつつう……」

側に置いておいた鍔の大きな麦わら帽子を被ってみるが、陽射しを防ぐことができても気温が高過ぎて、女の子の肌には玉のような汗がいくつも浮かんでいた。

しかも風が止まってしまったので、女の子は露出したおっぱいを水着の中に戻す。

脱力した表情になった女の子は、既にこの場から帰りたい気持ちでいっぱいになる——

——と、砂浜を踏む音が近付いてきた。



# 邪悪爆乳○学生 NOVEL

～ばいずりオムニバス～

## 体験版

発行者：二式龍二

サークル：F A文庫

- 無断転載、複製、複写、再配布、ウェブへのアップロードはご遠慮下さい。
- **Reproducing all or any part of the contents is prohibited.**
- 禁止私自转载、加工
- 무단 전재는 금지입니다.